



— も く じ —

◎巻頭言	1	◎特色ある学校	18
◎関プロ山梨大会報告	2	◎地区だより	19
◎第53回県教頭会研究大会	3	◎ひろば・編集後記	20
研究大会分科会報告	4～17		

人材の確保・育成について思うこと

巻 頭 言

栃木県中央児童相談所 参事兼所長 藤 本 早



平成27年10月に厚生労働省から「平成26年度中に全国207箇所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は88,931件（速報値）で、対前年比120.5%の15,129件の増加となって過去最多を更新した」旨の発表がありました。児童虐待の防止等に関する法律が施行された平成12年度は17,725件であったので、14年間で約5倍に増加したことになります。この間、平成17年度からは市町村を児童虐待相談の受理機関に位置づける、平成24年度には児童相談所の児童福祉司の配置基準を見直すなど、児童虐待の相談体制の強化策がとられてきましたが、児童虐待相談の急増に追いついていないというのが現状です。

そのため、国では専門委員会を立ち上げ、新たな相談・支援体制の検討を始めたところで、そこでは、児童虐待の予防的観点からの家庭支援の強化や、児童相談所が担っている強制的・介入的機能と支援的機能の分離、社会的養護を要する児童に対する継続的な自立支援システムの構築など、児童家庭支援に関する広範囲な議論がなされており、実現すればかなり大きな変革となります。しかし、組織の役割や機能を見直せば良いというものではありません。組織が求められる役割を果たし真に機能するためには、そこで働く人材の確保・育成が何よりも重要となります。

前述の専門委員会では、職員の専門性の向上を図るため児童福祉司の任用要件の見直しや指導的職員の公的資格化などが検討されているようですが、果たしてこのような方向で良いのだろうかという疑問を抱いてしまいます。確かに、社会福祉士や精神保健福祉士などの資格を有する者を専門職として児童福祉司に任用すれば基本的な知識や技術は担保できるでしょうが、私は、児童相談所の職員に必要なのは「子どもへの思い」と使命感や意欲ではないかと考えています。これらがあれば、知識や技術は日常の業務や研修を工夫することで何とかできるのではないのでしょうか。本県では、一般行政職、心理職、保健師、児童自立支援専門員、教員など多くの職種を児童福祉司として任用していますが、大学で社会福祉やその周辺領域の勉強をしていなくても立派な業績をあげた人はたくさんいます。任用要件を厳しくするという事は、このような人材を排除してしまうことになってしまい、広く人材を求めることができなくなるのではないかと危惧しています。

とは言え、どのような人材を任用しても、どう育てていくかが大きな課題であり難しいところであることに変わりはありません。おそらく学校でも同じ問題を抱えているのではないのでしょうか。私は、組織にはそれぞれの目標とか価値観があると考えており、その目標とか価値観を明確にし共有できるようにすることが管理職の責務であり職員育成の第一歩ではないかと思っています。

関ブロ山梨大会報告

第56回関ブロ山梨大会に参加して

宇都宮市立桜小学校 宇賀神 玲子

第56回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会が11月12日(木)・13日(金)の2日間、山梨県甲府市において開催されました。

開会行事の中、研究部長からの基調提案では、第十期全国統一研究主題のキーワード「生き抜く力・絆づくり」を、山梨大会では「たくましい力」と「しなやかな心」ととらえ、夢と希望に向かって自ら学び・考え・行動する力や他者を思いやり、社会の絆を深める心を育むための学校づくりを進めていくことが大切であるという考えが示されました。



続いて、作家の林 真理子さんの「私の仕事から」という演題での記念講演がありました。林さんご実家が本屋さんであったこともあり、幼いころから想像の世界に遊ぶことが多かったとのこと。本を通じて世の中にはもっと広く自由な世界があることを知っていたからこそ、成長する過程で出会う様々な困難や辛い場面も、「こんなことくらいで自分の人生狂わされてたまるか」という思いで乗り越えることができたと話された言葉からは、本を読むことの深い意義が伝わってきました。

また、高校時代の先生が、「このクラスから有名人が出るとしたら林だな」と、いう一言をかけてくださったことで「自分は絶対有名人になる」という「根拠のない自信」を持つことができたというお話からは、我々教師の一言の重みを改めて考えさせられました。

自分がいつも楽しくいきいきと仕事をしている姿を見せることが子育てには一番大切、編集者(人)と良い関係を築かなくては仕事はできないなど、後から後から溢れ出る林さんの仕事に対する思いの中に、強くたくましい、作家としての誇りと信念のようなものを深く感じた記念講演でした。

関ブロ研究大会山梨大会提言を終えて

宇都宮市立篠井小学校 大久保 佳典

関ブロ山梨大会では、教職員の専門性の向上をテーマに、特別支援教育の充実と危機管理能力の向上を2本柱として提言をさせていただきました。時宜を得た提言であったため、各都県の皆様も真摯に提言を受け止めてくださり、活発な論議が交わされました。特に児童対応への事例では、まだ取組が浅く、地域によって発生や被害の状況が大きく異なるため、会場から興味津々という雰囲気が感じられました。

また、山梨県を始めとした各都県の先生方も大変温かく接してくださり、副校長・教頭としての連帯感を深めることができました。

今回、提言の機会を与えてくれた宇都宮市・上三川町小学校副校長会と提言原稿を作成してくださった6班の皆様には心からお礼申し上げます。

関ブロ研究大会山梨大会を終えて

宇都宮市立豊郷中学校 野澤 秀行

11月12日、13日の2日間にわたり、第56回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会山梨大会が、甲府市で開催されました。

栃木県を代表し宇河地区中学校副校長・教頭会の研究部長・井上圭一副校長(宇都宮市立陽東中学校)が、第1B分科会「教育課程に関する課題」において、研究主題を「小学校や地域のつながりを生かした教育課程の工夫」、副主題を「教頭職のかかわりについて」として提言発表を行いました。発表は、地区内各中学校が現在実践している、小学校や地域と連携した具体的な取組について、その内容・成果・課題等を整理し直し、それらを踏まえて、今後の地域連携や小中一貫教育の教育課程の工夫や教頭職の関わりについて再考するものでした。

発表後のグループ協議では、各都県の地域連携や小中一貫の状況や課題等の意見交換を行うことができ、有意義な実り多い2日間となりました。

第 53 回 県 研 究 大 会

コミュニティデザインは人をつなぐこと

講師 東北芸術工科大学教授 コミュニティデザイン学科長 山 崎 亮 氏
海士町プロジェクト（島根県の離島）

2007年、総合計画を作ってほしいと依頼を受けた。コミュニティデザインを行政の職員と住民とで考えていきたいと提案し、海士町ならではの笑顔を追求し、都市とは違う島の幸福を目指すことにした。『産業チーム』『暮らしチーム』『環境チーム』『人チーム』の4チームに分かれ、実際の活動を行った。その中には「魅力ある島前高校をつくらう」と、都市部の中学生にチラシをまいて多くの生徒を集め、廃校の危機にあった高校を立て直す取組や、海士町の生活の基本である「ないものはない」をキャッチコピーとする取組がある。海士町のそれぞれの地区では、集落を出て行った人たちに手紙を書く、「防災通信」を発行する、「海士チャンネル」という番組を作るといった取組も行った。中央教育審議会では、学校支援地域本部事業の推進が検討されている。いかに地域の主体性を生み出す構図を作るか、その中で教員はどう動いたらよいかを教頭・副校長は考えていかなければならない。学校と地域の関係性も考えながら、学校は、地域の人たちが何かやりたくなるような働きかけをする、教員や児童自身が動くのではなく、学校がコーディネート役をどう担うのかが重要である。笠岡諸島こども振興計画（岡山県・瀬戸内海）

子どもが中心となり、島の10年計画である「総合計画」を作ったことで、大人たちも立ち上がり、総合振興計画を作り上げた。子どもたちも、島の魅力に気付き、島を離れることはあっても、やがて戻って来たいと考えている。

地方創生（地域に雇用を！）

学校は、キャリア教育で個人事業主をポジティブに子どもたちに伝えてほしい。昔はほとんどが個人事業主だった。これから、企業の寿命が短くなることを考えて、個人事業主として独立して働くことを可能にしてほしい。その現場は地域にある。働き方、生き方にビジョンを与え、地域の方から刺激を受けながら、ともに楽しく活動していきたい。（文責：宇都宮市立上戸祭小学校 刀川 恵子）

研究大会分科会に参加して（運営責任者として）

大田原市立湯津上中学校 君 島 孝 典

日々の業務の中で第十期2年目の研究に取り組み、今研究大会に向けた資料を作成し、提言発表をしていただいた各地区の研究班の先生方、本当にありがとうございました。また、迅速な会場設営やスムーズな進行・記録など、運営を担当していただいた司会者や記録者、会場係の先生方にも大変お世話になりました。加えて、参加された皆様が、提言内容や協議の柱に対して熱心に意見を交換されたことにも感謝いたします。様々な意見を受け、次年度の研究の方向性も固まったことと思われまます。会の締めくくりとして、指導助言の先生の適切なアドバイスをいただき、今年度の研究会も充実したものとなりました。

運営責任者として、改めて感謝申し上げます。

研究大会に参加して（会場係）

宇都宮市立瑞穂野中学校 野 中 洋 子

朝8時の打ち合わせの後から、会場係の仕事は始まりました。開会式のステージ上の机・イス等の準備から会場席のロープ張り、来賓・役員席の掲示を初め、国歌CD・録音の操作について会館担当者との打ち合わせなど絶え間なく続きました。式開始後はステージ音響の場所に座り録音等の確認をしました。講演会の準備、ステージ上の片づけ、弁当・ペットボトルの後片付けをして会場係の仕事は無事終了しました。

今年教頭になったばかりで研究大会も係の仕事もすべてが初めてのことでしたが、ずっと裏方で座りながら多くの方の様子が見られ、来賓・講師・役員の方々の思いが少しは分かった感じがしました。今回この会場係の仕事を通していろいろなことが勉強になりました。ありがとうございました。

第1 A・B分科会 教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助言者 栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹 俵藤 秀之 先生

地域連携の推進と教頭の関わり

—地域と小中学校の連携の在り方—

提言地区 佐野地区 小中学校教頭会

小学校や地域のつながりを生かした教育課程の工夫

—教頭職の関わりについて—

提言地区 宇河地区 中学校副校長・教頭会

1 提言趣旨

(1) 佐野地区小中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

「生きる力」を育成していくためには、学校・家庭・地域の連携が大切である。また、佐野地区は、平成25年度より小中一貫教育推進パイロット校区に指定され、より質の高い学校教育を目指している。そこで、小中一貫教育の研究を推進するとともに、地域連携教員と教頭の役割を明確にすべく、本主題を設定した。

イ 研究の概要

市の定例教頭会で共通理解を図り、連携する各学校の教頭が連絡を密にし、研究を進めた。

小中一貫教育推進のために、全体をまとめる推進委員会を組織し、推進ブロックごとに、4つの推進部会を組織し研究を進めた。また、中心となる研究推進主任の役割を明確にするとともに、地域連携教員と教頭の役割を明確にし互いに連携する推進体制を構築した。

ウ 成果と今後の課題

小中一貫教育推進に向け、様々な交流が図れ、学力向上に向けた多くの取組が充実したものになった。また、地域ボランティアにより地域の教育力が活用でき、学校の活性化を図ることができた。

さらには、小中一貫教育の実施における教頭、地域連携教員の役割を整理することにより、教職員の資質向上につながった。

しかし、教頭、地域連携教員等の役割の整理はできたが、学校の実態、地域の実情を踏まえ、校内組織体制を再確認し、教頭としてどのような関わりが必要か整理していかなければならない。



(2) 宇河地区中学校副校長・教頭会

ア 主題設定の趣旨

学校は、地域の教育力を生かしていくことが、また、保護者や地域住民は子どもたちを健全に育成するために自らの教育力を高めていくことが求められている。

このことを踏まえ、研究主題を「小学校や地域のつながりを生かした教育課程の工夫」、副題を「教頭職の関わりについて」として研究を進めることとした。

イ 研究の概要

宇都宮市においては、すべての児童生徒の学力保障と学校生活適応を目指すと共に学校教育の充実を図る「小中一貫教育・地域学校園」制度を既存の施設を活用した施設分離型で実施することとした。それらを最大限に生かして地域学校園化・自校化を推進し、職員の負担感に見合った取組がさらに充実するよう教頭の関わりについて推進していく。

ウ 成果と今後の課題

小中学校教員の相互理解が深まり、関係が強化されつつある。また、小6の中学校入学の不安が解消され、その後の学校生活の適応が図られつつある。しかし、教育課程の編成や指導の工夫をすするとともに、教職員の業務負担にも配慮する必要がある。また、普段の授業や取組の質を継続的に高めていくために、教頭が教務主任と連携・工夫していく必要がある。

2 グループ協議内容

(1) 〔あ〕班

○提言Ⅰについて

- ・中学生が小学校で活動できることがよい。
- ・地域を巻き込んだ取組ができています。
- ・地域社会の果たす役割とはなんだろうか。地域にどのように周知させたらよいか。主旨と依頼内容は具体性が必要である。

○提言Ⅱについて

- ・1つ1つの活動は何のため、どんなメリットがあるのか見極めないといけない。
- ・小中一貫教育のカリキュラム作成については、小中一貫教育主任と教頭が十分連携しあいながら作成することが大切。
- ・小中連携主任と地域連携教員の隙間を埋めるのが教頭の役割であろう。
- ・地域連携が担当者みでの活動にならず、地域の人たちに頼みやすい環境づくりが大切。
- ・校長がリーダーシップをとれるように、教頭の具申が大切。

(2) 〔か〕班

○校内体制作りと教頭のリーダーシップ

- ・校内体制づくりにおいてはリーダーシップが大切であり、小中連携において教頭は校内外でリーダーシップをとらねばならない。
- ・教頭は弱いところを支援していくことが大切。
- ・教頭は地域の人と話しやすい環境をつくる。
- ・校長に対しても自分の意見を伝えながら、連携を図っていくことが大切である。
- ・若手の地域連携教員を育てていくことも教頭としては大切な役割となる。

○教育課程の工夫改善

- ・時数を小中ともに確保することが難しい。特に小学校は下校時刻が決まっているので確保が難しいが、校長や教務と連携して時数確保に努める必要がある。

(3) 〔き〕班

- ・小中一貫教育の推進においては、学校間の差があるが、中1ギャップ改善を目指すことがねらいである。
- ・中1ギャップの改善は高学年から問題である。
- ・将来施設一体型を進める地域もある。先進校視察をしたり、中学校を中心に学習指導、生活指導を進めていくことになる。
- ・小学校のうちから、5・6年の教科担任制も検討していくことが必要ではないか。
- ・セキュリティの問題はあるが、コンピューターシステムを整え連携できるとよい。
- ・学校と地域の連携は、話し合いを通して進めて信頼関係を築くことが重要である。

3 指導助言

(1) 提言Ⅰについて

- ・平成26年度の成果と課題をふまえて実情を把握している。
- ・小中一貫教育、地域連携において組織を生かしている。
- ・日頃の教育活動の中で教頭や地域連携教員の役割分担を明確にしている。
- ・地域の教育力を積極的に活用している。校内の組織、役割を明確にすることが課題である。今後の具体的な取組をまとめていた。
- ・地域連携協議会においては、地域とともに検討ができています。今後もぜひ続けてほしい。



- ・育てたい児童生徒像をどう地域へ伝えていくのかは教頭の役割である。

(2) 提言Ⅱについて

- ・小中連携や地域とのつながりにおいて、既存の組織を生かして活動している。
- ・宇都宮市の地域学校園制度は4年目を迎え独自に進める工夫がされており、地域が学校を支援する取り組みは他地区の参考になるであろう。
- ・教頭、地域連携教員、小中一貫教育主任の役割分担が大切であり、教頭の具体的なかかわりが重要であろう。

(3) 最後に

- ・地域連携、小中一貫が目的化していないか。これは手段であり、学校教育目標を具現化するための方策の一つである。
- ・小中一貫教育や地域連携を進めるうえで大切なことは、教育をよりよいものにする、地域の生涯学習社会（学びの場）の実現、教員の資質の向上、の3つである。
- ・管理職のリーダーシップ、教職員の意識の高揚、校内体制（役割分担の適正化）の整備が成功の要因となる。

（記録：谷村 洋子・執行 正義）

(6) 第1 分科会 教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第3(2)分科会 教育行財政に関する課題（合同）

助言者 栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹 石渡 美穂 先生

教育理念に基づく学校教育の実現を図るための教頭のかかわり
—教職員の参画意識を高める教頭のかかわり—

提言地区 下都賀地区Bブロック小学校教頭会

安心・安全な学校づくりを目指して

—児童の登下校の安全確保を中心に—

提言地区 宇都宮・上三川地区 小学校副校長会

1 提言趣旨

(1) 下都賀地区

Bブロック小学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

「教育理念」を「教育のあるべき根本的な姿」と捉え、「参画意識」を「教育理念に基づいて教職員が主体的に今日的課題に取り組むこと」と捉える。小学校は教職員の自律性の高い組織であるので、教職員一人一人の主体的な取組を方向付けながら、教育理念具現化を促進することが教頭のかかわりとして大切であると考え、研究主題に位置づけた。

と捉える。小学校は教職員の自律性の高い組織であるので、教職員一人一人の主体的な取組を方向付けながら、教育理念具現化を促進することが教頭のかかわりとして大切であると考え、研究主題に位置づけた。

イ 研究の概要

栃木市内を7地区に分け、地区の実践校7校が取り組んでいる今日的課題をもとに研究協議を行い、教頭のかかわりについて分析を行った。教育理念が示す事柄を明らかにし教職員に示す「内容提示」のかかわり、教育理念具現化のために校内外の調整をする「条件整備」のかかわりの2つを分析の視点とし、実践校の取組を更に詳しく見ていき、考察を行った。

ウ 成果と今後の課題

- ・本研究をとおして、教育理念具現化の動きを促進するための教職員の参画意識を高める教頭のかかわりは、「内容提示」と「条件整備」の2つで捉えることができること、「共に実践し俯瞰して見る」教頭のかかわりが大切なこと、「理念を実践から見つけ教職員に返す」教頭のかかわりが大切なことが分かった。
- ・本研究で分かったことの信頼性・妥当性を確かめるために、教頭のかかわりを長期的視点で見ている必要がある。



(2) 宇都宮・上三川地区

小学校副校長会

ア 主題設定の趣旨

学校の教育活動の基盤として、安全・安心な環境の確保が必要であるが、そのためには、学校だけではな

く、保護者や地域、関係機関との連携が必須となる。そこで、副校長・教頭として各方面にどのように働きかけ、取り組んでいくかについて調査し、実践を通して明らかにしたいと考えて本主題を設定した。

イ 研究の概要

平成27年度は研究の2年次である。平成26年度には安全安心のための学校づくりの現状分析と課題の把握を行った。2年次は、行政や地域との連携の比重が大きい児童の登下校の安全確保を中心に、各校での取組の実践と、副校長・教頭としての関わりを調査した。

ウ 成果と今後の課題

- ・関係機関との窓口を、副校長・教頭に一本化することにより、連携が円滑に行えた。
- ・副校長・教頭が関係機関との会議や日常的な協議の中で、児童の登下校の安全確保について取り上げることで、情報収集や課題解決が進んだ。
- ・学校や地域の実情を熟知している副校長が主体的にかかわることで、実現可能性が高く、効果のある問題解決が図れた。
- ・成果がある一方で、関係機関の事情や、意見調整の遅れなどにより、迅速な対応ができない場合もあった。

2 グループ協議内容

(1) 提言Ⅰについて

- ・参画意識を向上させるために、教職員評価を充実させ、各自が教育理念を踏まえて行動基準を設定し、中間面談も活用するなど、時々振り返る場面を設け、常に意識化を図ることが有効ではないか。
- ・学校全体を同じ方向にむかせていくには、教育理念を行動のレベルまで落とし込んで伝えていくことが必要である。
- ・教頭のかかわりを「内容提示」と「条件整備」の2つの面から整理することで、自分の実践を振り返るポイントになる。
- ・若手育成のためには具体的な「内容提示」を、ベテランの教員にはニーズに合った「条件整備」を意識している。
- ・教職員が自分たちで工夫していることが校長の学校経営方針や教育理念に結びついていることを教頭が見出し言葉かけをすることは、教職員の自信につながり参画意識を高める。
- ・参画意識を高めるには教職員の人間関係作りが大切である。コミュニケーションを取るのが勤務時間外になってしまうのが課題である。

(2) 提言Ⅱについて

- ・宇都宮市の「地域協議会」のような組織を他の市町でも設置して、自治会・安全協会等関係機関と連携をしやすい必要がある。
- ・地域関係者との連携の中でも、行政とのつながりが深い自治会長との連携は重要である。
- ・地域の活用では、学校が主導しすぎると継続が難しい。地域の自主的活動を取り入れるとよい。
- ・地域との連携・調整がうまくいっていない学校もある。副校長・教頭が学校の顔として、積極的に地域に出向くことが重要である。
- ・組織を作っても、高齢化などが進行し、機能していないこともある。学校が効果的に関わることで、定期的な見直しを図ることも必要である。
- ・標識の設置ひとつをとっても、どのような手順で要望するかわからないと対応ができない。行政的な手続や手順について、常日頃から情報収集が必要である。
- ・副校長・教頭は、学校や通学路の安全上の問題について情報を収集し、関係機関や地域との窓口となって働きかけを行うとともに、理解と協力を得るための日常的な連携交流に努めることが必要である。

3 指導助言

(1) 提言Ⅰについて

教育課程を編成する際に全教職員がかかわることが教職員の参画意識を高める第一歩になることが前提として本研究がある。教職員が日常の中で各取組を実践していくと具体的な支援が必要な場面が出てくる。そのような具体的な場面を「内容提示」と「条件整備」に分けて分析するという方法は大変興味深い。こういう視点で、教頭のかかわりを見直していくと新たな気づきがあると思う。

共に実践し俯瞰して見ることについては、学校で具体的な取り組みを進める中で、各担当が取組に追われるなかで、目指す児童像といった本来の目的を見失ってしまうこともあり得る。そのようなときに教頭が、学校全体の動きを把握し適切なアドバイスを送ることで目指す方向を誤らずに大きな成果を上げることができる。

理念を教職員に返すかかわりについては、各担当の取組で効果があった取組について教頭が取組のよさや特長を示すことで



全教職員が共有し学校全体に広げることにつながる。

(2) 提言Ⅱについて

安心安全な学校づくりについて、教頭はまず学校の実態を家庭・地域との協力のもとに把握し、課題を見つけ、解決方法を考える必要がある。その際、学校（教職員）のみで解決できるのか、保護者や地域の協力が必要となるのか、行政の力が必要なのか、見極めが重要である。教育行財政の活用にも限界があるため、何を優先するか判断したうえで必要な連携をとり、実現へつなげてほしい。

安全点検には、保護者・地域・警察・教委など多くの関係者・関係機関が参加するが、保護者や地域の意見をもとに総合的に判断して行政と連携する必要がある。また道路拡幅や交通規制等は地域住民の理解が不可欠である。それらは教頭の日々の活動によるところが大きい。

今後は防犯の視点も加味するなど、様々な視点から研究を継続していってもらいたい。

(記録：篠原 幸江・神野 安伸)

助言者 宇都宮市立晃陽中学校長 湯沢 一郎 先生

子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方 — 異校種間連携における教頭の果たす役割 —

提言地区 芳賀地区 芳賀郡市小中学校教頭会

すべての児童生徒にとって魅力ある学校をめざして — 不登校未然防止に向けた教頭としての取り組み —

提言地区 塩谷地区 小中学校教頭会

1 提言趣旨

(1) 芳賀地区

芳賀郡市小中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

本地区では「とちぎ教育振興ビジョン三期計画」、「平成27年度栃木県児童・生徒指導の基本方針」及び「芳賀の教育」を受け、「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を目指し、「子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方」を研究課題とした。

子どもの発達課題の達成を異校種間連携の視点からとらえ、学習指導や児童・生徒指導の推進における教頭の果たす役割を追求すべく、本主題を設定した。

イ 研究の概要

今年度は昨年度の反省のもと、解決策を「目標・問題意識の共有化」、「発達課題の明確化」、「情報の共有のシステム作り」の3つに整理した。教頭の関わりを明確にすべく、関与表を作成し研究を進めてきた。

ウ 成果と今後の課題

- ・小中教員の話合いにより、具体的な目標の共有化が図れた。
- ・交流授業などをとおして、発達段階を考慮した連続性のある指導方法を確認できた。
- ・情報の共有のシステムが構築されたことで、双方向での一貫した支援が可能になった。
- ・連携が容易ではない学校においてもスモールステップの向上を目指し、教頭が積極的に関与していくことが求められる。
- ・教頭は効果的な連携に向けて、教職員に対して一層の意識の高揚を促すとともに、教職員の負担軽減に努める必要がある。



(2) 塩谷地区

小中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

児童生徒指導上の重要課題の一つに不登校があげられる。そして一度不登校に陥ってしまうと学校・学級への復帰が難しい現状が認められる

ことから不登校を未然に防止することが大切である。

そのための最も効果的な方策は、すべての児童生徒にとって魅力ある学校づくりであるにとらえ、研究主題を設定した。

イ 研究の概要

児童生徒にとって「居がい感のある学校づくり」や児童生徒の「自己肯定感を高めること」が大切であると考え、教頭としてどのように学校経営に関わることが必要なのか考察する。

「学習指導の充実」「小中連携を通じた人間関係構築能力の育成」「学校と家庭、地域との連携の充実」の3点を研究の視点とし、各中学校区ごとに事例をもちより分析・考察を行う。

ウ 成果と今後の課題

- ・教師の授業の質的転換が図られ、児童生徒にとってわかる授業が展開され自己肯定感の向上が見られる。
- ・Q-U検査の分析結果の活用やSCとの連携により、配慮が必要な生徒への手立てがうまくできている。SCとの連絡調整や情報収集がスムーズにできるとよい。
- ・地域の一員であることを自覚し、多くの児童生徒がボランティア活動に参加している。教頭と地域連携教員の役割分担を明確にしておくことが必要になる。

第2 A・B分科会

2 グループ協議内容

(1) 提言Ⅰについて

〔あ〕班

- ・小中教員が話し合う場を設定することで、異校種間連携が進めやすくなった。(行事の調整、部活動紹介、児童・生徒指導など)
- ・交流の機会を設けることで、小中の理解が深まった。(英語指導、中学校教員の出前授業、特別支援学級、合唱など)
- ・地域の実態に応じた連携が重要である。

〔お〕班

- ・小中の情報共有(プラスの変容)が連携の基盤である。
- ・相互授業参観や乗り入れ授業など、互いに別のフィールドにたってみることが重要である。
- ・児童会と生徒会、6年生と中1など全児童・生徒が対象でない活動からの実施がスムーズである。
- ・地域や家庭との連携は学校からの働きかけが重要となる。

〔き〕班

- ・大規模校での小中連携は、子どもをどう動かすかなどの面で難しさがある。
- ・教師の交流はできるが、移動手段など子どもの交流は容易ではない。
- ・家庭を巻き込んだ取組は素晴らしい。
- ・教頭は小中連携の目標づくりと連携のきっかけづくりなど、推進役になることが大切である。

(2) 提言Ⅱについて

① 学習指導の充実

- ・授業力アップのため「めあての提示」「ふり返り」を必ずやるように呼びかけている。(う班)
- ・学力向上を図るための授業研究を教務や学習指導主任とともに推進している。(か班)
- ・中学校の45分の授業づくりにはかなりの努力がいるだろう。教員の確保にも課題があるが、教頭は体制を作っていくことが重要。(き班)

② 小中連携を通じた人間関係構築能力の育成

- ・中学校説明会の前に、小学校の担任が中学校に向いて児童の様子について説明したり、保護者と面談したりして情報交換をする。(あ班)
- ・スクールカウンセラーとの話合いや情報交換のパイプ役を行っている。またQ-U検査の活用により不登校が減ってきている。(い班)
- ・Q-Uの活用にあたっては、全教員のスキルアップが肝要。分析だけに終わらない実践的な研修が望まれる。(お班)

③ 学校と家庭、地域との連携の充実

- ・地域連携教員は、教諭が行っている場合が多いが、実際の連絡調整は教頭が行っている。市によっては、独自に地域コーディネーターを育成しており、学校のことを理解している人がコーディネーターになっている。(え班)
- ・地域連携教員とともに、連絡・調整を行いながら、顔の見える関係づくりを心がける。(く班)



3 指導助言

(1) 提言Ⅰについて

- ・小中連携の際、互いの立場から相手を見てしまい、批判めいた声が聞こえることがある。そうした時、管理職は「そうではない。学ぶべき点がある。」と伝えなければならない。
- ・逆川小・中のコミュニケーション能力を高めるための連携は素晴らしい。小中連携の見本となる。焦点をしぼらないと得るものがなくなる。総花的では良くない。

(2) 提言Ⅱについて

- ・不登校未然防止に努めるには、全ての児童生徒にとっての居場所を確保することが大切。「A先生に会うとホッとする」というのも居場所である。
- ・発達障害など2次的な要因から、なかなか学校にたどり着けないなど、不登校になっていくことが多い。その子どもや保護者に対して教頭が積極的にアプローチしていくことが大切。
- ・わかる授業を実践する。「つまづきやすさ」を考慮して教師が授業を行うように意識させるのも教頭の仕事である。

(3) 最後に

- ・教頭は、保護者からの電話の第1受け手になる場合が多い。保護者からの内容を担任にどのようにつなげるか、そのつなぎ方一つで、不登校の未然防止につながる。
- ・管理職は教師への支援・助言を通じて子どもと関わる。
- ・うまくいかないことがあると、次に行く時に消極的になりやすい。教頭は修正力、前向きな姿勢を職員に示す必要がある。

(記録：小筆 一成・八嶋 純子)

助言者 足利市立山前小学校長 小池 正勝 先生

情報機器を有効に活用するための環境づくり

－授業での効果的な活用を目指して－

提言地区 那須地区 大田原市教頭会【B】

豊かな人間性をはぐくむ家庭・地域との活力ある連携をめざして

－地域・関係団体とのかかわりを生かした心豊かな生徒の育成－

提言地区 上都賀地区 中学校教頭会

1 提言趣旨

(1) 那須地区

大田原市教頭会【B】

ア 主題設定の趣旨

大田原市は、ICTを活用した教育を推進しており、タブレットPC、電子黒板等を順次小中学校に整備し、今年度の夏季休業終了時をもって完了した。

それぞれの学校において様々な工夫や課題が見られる中、教頭として、授業の中でのICT機器の活用について、授業効率がより高められるように研究を進めたいと考え本主題を設定した。

イ 研究の概要

各学校のデジタル機器全般の使用状況や活用に係る様々な課題を検討するために、アンケート調査を実施し、考察した。調査項目は、

- ・機器の配置状況とその管理者
- ・機器の管理における課題
- ・機器の活用状況と教頭の関わり
- ・機器の活用における課題
- ・課題解決のための工夫 としての。

ウ 成果と今後の課題

- ・様々な課題を克服しながら、ICTを活用した授業づくりに積極的に取り組み、児童生徒に生きる力を育てていくことが大切である。
- ・教頭として、市内の研究学校やICT支援員等との連携を図りながらネットワークづくりに尽力し、情報担当者と共に様々な事例を集約して、教職員に情報提供していくことが大切である。
- ・教頭として機器の管理責任者や管理場所等を明確にししながら、日々の管理に注意を払っていく必要がある。



(2) 上都賀地区

中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

少子高齢化が進み、子どもたちを取り巻く環境や家庭の状況、地域のコミュニティも変化する中で、ソフト・ハードの両面から学校の役割が

重視されてきている。

地域と連携しながら子どもたちの豊かな人間性を育むために、学校は地域・関係団体とどのように連携を深めていくか、教頭としてどのように関わっていくことが望ましいかを考察するため、本主題を設定した。

イ 研究の概要

研究の考察をするため、地域教育協議会と教頭の関わりとして、「地域教育協議会の発足」「地域教育協議会の再編」の2事例、地域・関係団体と教頭との関わりとして、「アイデア会議への参加」「地域のお祭りへの参加」「特別支援学校との関わり」の3事例を取りあげ、分析、考察を行った。

ウ 成果と今後の課題

- ・地域教育協議会は学校の教育活動内容の範囲を広げることができ、地域で子どもたちを育てていくとする気運を高めることができた。
- ・子どもたちは地域の行事に参加し貴重な体験をしたことで、大きく成長させることができた。
- ・地域を愛する心や、地域貢献、夢を抱く機会を作ることができた。
- ・今後は、学校と地域の実情やニーズを考慮し、効果的な教育活動として、教頭としてどのように維持継続させていくか、計画していくかが課題である。

2 グループ協議内容

(1) 協議の柱1について

「ICT機器の活用に係る教職員の資質向上にむけた校内研修の企画・運営」

- ・情報機器の活用と併せて、アナログ（ノートの取り方等）との兼用が大切である。また、使い方の共通理解が必要である。
- ・教員間での差があり、教員のスキルアップも課題である。今後、使うことが目的にならないような研修を計画していく必要がある。
- ・個人情報管理を徹底する必要がある。
- ・教頭として、活用のきっかけ作りを行っていく。特に、年長者と若手の交流や教え合いの場となるようコーディネートしていく。
- ・中学校は研修時間の確保が十分にとれない。社会人の方を講師にして実践している例もある。
- ・力量に差があるため、教頭としていつでも誰にでも教えあえる雰囲気をつくる。
- ・互いの授業を見合う中で、ICTを使いたくなるような“よさ”を広めていく。
- ・活用することが目的ではなく、学力向上や授業のねらいに結びつけることが目的であることを見失ってはいけない。
- ・効果的な事例や先進校の取組等を紹介したり、積極的に職員を研修に派遣したりする。

(2) 協議の柱2について

「地域や関係団体とのかかわりを生かした心豊かな生徒の育成のために、副校長・教頭としてどのようにすればいいか」

- ・教頭が地域に出向き地域の要望を聞く地域のニーズと学校のできることの差を埋めていくことが役割になる。
- ・教頭として地域を知り、学校にかかわって下さる方々とのつながりを作り、次へ引き継ぐことが大切である。
- ・協議会の設置には地域により差がある。地域行事にボランティアで生徒が参加することもある。教頭は地域に出て行くことが大切。
- ・地域連携教員と役割を分担して、効果的な実践を心がけていきたい。地域ならではの教育効果は多々あると考えるので、積極的な連携の推進は今後も推進していきたい。
- ・地域の協力を得るためには、学校も地域へ協力するという考えが必要である。先生方の協力で顔や名前を覚えつながりを深めていくことも大切である。

3 指導助言

(1) はじめに

2つの部会のテーマはどちらもこれからの教育、次期学習指導要領の実施に向けて大切なものである。これらにかかわり、しっかりねらいを持って、分かりやすく提言されていた。

(2) 那須地区大田原市【B】の提言に関して

- ・授業改善を目指す取組は素晴らしいものであり今回示された成果や課題を今後も各学校で生かしてほしい。今後、より充実した取組を県内に発信してほしい。

- ・「カリキュラム・マネジメント」の視点をもってICT活用を検証していくことが今後の有効活用に繋がる。

そのために教頭職としての総合的な評価が大切になってくる。

- ・児童生徒や教職員にとって実感として成果が分かるような仕組みや仕掛けづくりを考える必要がある。

- ・機器の管理と活用に関しては、ラーニングコストを念頭に置いて、短期・長期の活用目標や達成目標を想定しながら計画的に対応する。

- ・かつてのPC導入と同じように、事務職員との連携を密にしながら教育環境づくりに目を向けていくことが“チーム学校”づくりに繋がる。

(3) 上都賀地区の提言に関して

- ・上都賀地区は学社融合の研究で一世を風靡し、地域と学校が共同で子どもたちを育てる土壌があり、その中で、明確なねらいを持って取り組まれていて素晴らしい発表である。地域に目を向け、児童生徒がかかわる取り組みの参考になるだろう。

- ・地域に出て行く活動が主であったが、学校の教育課程の中での活動を考えていくことが大切であると思う。

- ・連携を考えると、学校教育のねらい、役割を考え、どこでかかわった方が良いか吟味し、検討していくことが教頭としての仕事と考える。無理のない連携・運営に向け、コーディネートしていくことが大切である。



(記録：明澤 伸宏・渡邊恵美子)

第4 A・B分科会 組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

助言者 真岡市立真岡小学校長 大関 馨 先生

学校運営の活性化を図るための組織・運営のあり方 —「見える」「わかる」組織・運営に向けた取組—

提言地区 上都賀地区 小学校教頭会

教師力を向上させ組織を活性化させる教頭の関わり —組織・運営の課題把握と各校の工夫—

提言地区 下都賀地区Cブロック中学校教頭会

1 提言趣旨

(1) 上都賀地区

小学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

さまざまな教育的課題が山積する今日、チームとしての学校の在り方が問われている状況を踏まえ、学校教育目標を達成していくために、教頭にはどのような学校マネジメント力が求められ、どのような手法が学校運営を活性化させるのか、そのあり方を探るために本主題を設定した。

イ 研究の概要

3年間の継続研究を通して、学校マネジメント上、教頭の果たすべき役割と学校運営の活性化のための施策を明らかにしていく。

研究2年次の本年度は概念の明確化と仮説～「シンプル・ビジュアル・シェア」していくことで、「見える」「わかる」ようになり、学校運営を活性化させることができるであろう。～の検証を進めることとした。

ウ 成果と今後の課題

学校評価や地域連携などについて、仮説の手法を意識的に取り入れることで、学校全体が「見える」「わかる」ようになり、結果として学校運営の活性化が図れることが実証された。

研究の過程においては、これまで捉えることが難しかった教頭実務の全体像を「見える」ようにすることの重要性も認識された。学校のさらなる活性化につなげるために、今回の仮説の視点を、今後さまざまな教育活動に広げていくことが課題である。



(2) 下都賀地区

Cブロック中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

「言語活動の充実」による学びの集団の育成から教科経営の質を高めるために、教頭が意図的に関わることで、学校の重点目標に各教科の指導

目標を連動させたことで教職員の専門性や指導力の向上につなげることができた。Cブロック中学校での授業公開も進み、研究の成果を多くの教職員で共有することができた。今後も中学校の交流を進め、組織運営の課題を検討し、特色ある学校づくりに役立てる研究を推進していきたい。

イ 研究の概要

①各学校の組織・運営の課題を把握し、PDSにより改善できる組織体制づくりをする。

②現状調査と課題把握のためアンケートを実施し、教師力向上や組織活性化を意図した教頭の関わりを模索し交換し合う。

③1市2町にまたがる8中学校の特色ある取組を参考に自校化を図る。

ウ 成果と今後の課題

アンケートの結果から、Cブロックの半数の中学校に偏った年齢別教職員構成が確認できた。また、校務分掌においてリーダーシップを発揮しているのはⅢステージの職員が圧倒的に多いことや年代別の希望校務分掌の傾向が確認できた。

今後は、ミドルリーダーの育成はもとより、キャリアⅢの分掌をⅡに移行しつつ、Ⅰも育てていかななくてはならない。OJTだけではなく、教える・伝える機会を工夫し実践することが急務である。

2 グループ協議内容

(1) 提言Ⅰについて

- ・シンプル、ビジュアル、シェアはフレーズとしても響きが良く分かりやすい。また、学校経営ビジョンを意識化させるために、学校評価の改善は必要である。職員が主体的に取り組めるしくみづくりが大切であろう。〔あ班〕
- ・教頭運行計画をまとめることは、職員の参画意識を高めると共に教頭自身の職務の効率化にもつながる。教頭はスピーディに仕事に取り組む姿勢が大切である。地域連携計画は子どもたちだけでなく職員にとっても、作成の後に確認し合うことが必要だろう。〔え班〕
- ・学校評価のDCPAサイクルは、先ず管理職が流れを把握しておく必要がある。教職員評価実施計画は、職員が目標を持ちやすくなるだけでなく、管理職にとっても有効である。地域連携活動表に時系列と関連する活動があれば見やすいが、作成する時間の確保が難しい。〔く班〕
- ・「見える」「わかる」に関する具体的な提案があった。教頭運行表は次に引き継ぐために必須である。地域連携活動についても運行計画に位置づけることが必要であろう。〔こ班〕

(2) 提言Ⅱについて

- ・ミドルリーダーの設定基準が各校でまちまちである実態があるが、主任を中心に組織を活性化し、若手の育成をしていくことは急務である。
- ・アンケートや「教育文化伝達のために」シートの活用～ベテランから若手へ～は、若手からミドルリーダーまで、人材育成を目的として活用できる。〔あ班・え班・こ班〕
- ・シートについては、ベテラン教員の戒めにもなり、リーダーとして行動規準表の目標設定にも活用できる。〔あ班〕
- ・シートの活用は、ベテランからミドルリーダー、若手へと、日々声かけをする機会が生まれ組織の活性化につながる。〔あ班〕
- ・各校ともミドルリーダーの存在が少ない現状で若手をリーダーとして起用するときは、ベテランをサブに付けることで日常的に育てることが可能になるであろう。〔あ班・こ班〕

3 指導助言

(1) 提言Ⅰについて

- ・グループ発表で共通していた意見は、シンプル、ビジュアル、シェアが分かりやすいとりくみであるということだった。各校で取り入れられることを取り入れてほしい。
- ・「見える」「わかる」組織の推進は多忙感の解消にもつながる。その効果は次の5点である。
 - ①職員の意識の共有化が図れる。
 - ②さまざまな仕事と自分の目標とを関連付けることができる。
 - ③見通しを持って業務を遂行できる。
 - ④周囲の協力が見込まれる体制作りにつながる。
 - ⑤上司や同僚のサポートが得られやすくなる。
- ・教頭は校長の経営方針を具現化するために、職務を「見える」「わかる」ようにすることで組織の活性化を図ってほしい。

(2) 提言Ⅱについて

- ・ミドルリーダーの先進校視察、研修を伝達させていく取組は、教師力向上につながるものすばらしい。
- ・学校経営とは、組織に通じ、マネジメントの力量が必要である。この鍵となるのは、教務主任、学年主任等のミドルリーダーであり、その役割は重要である。今後も計画的なミドルリーダーの育成をお願いしたい。
- ・「教員文化伝達シート」は、ベテランの先生方の力を生かす良い機会である。これを生かして、ミドルリーダーに火を付けるのも管理職の役割である。



(3) 最後に

- ・目指す管理職として、①経営者としての視点、②人材育成者としての視点、③教育者としての視点を持ちながら校長と二人三脚で学校経営にあたってほしい。

(記録：杉浦 昭博・杉内 一恵)

第5 A・B分科会 教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

助言者 宇都宮市立一条中学校長 半田 均 先生

教職員の資質・能力を伸ばす教頭のかかわり —協働してよりよい教育活動を実践する教職員の育成—

提言地区 宇都宮・上三川地区 小学校副校長会

教職員の資質向上を目指して —学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成—

提言地区 足利地区 小中学校教頭会

1 提言趣旨

(1) 宇都宮市・上三川地区

小学校副校長会

ア 主題設定の趣旨

教職員が幅広い視野と確かな指導力を身に付けられるようにするために、教頭としての効果的なかわり

方に加え、共通の目標をもって協働してよりよい教育活動を実践する教職員集団づくりをいかにすべきかを中心に研究をすすめようと、本主題を設定した。

イ 研究の概要

研究の2年次として、次の具体的内容について考察した。・補充的学習や少人数指導を学校全体で指導方針を統一して実施する。・共に学びあえる校内体制を構築する。・教職員評価制度を活用し人材育成を図る。・校内研修の企画と運営を行い、服務に関する危機管理意識を醸成する。・地域の教育力を生かせるように校務分掌を見直し人材育成を行う。

以上の5点について各校で実践し、教頭としてのかかわり方について検討した。

ウ 成果と今後の課題

風通しのよい職場環境をつくり、教職員のつながりを強めていった。

教職員評価制度の活用については、学校経営方針を意識した目標設定と細かい授業観察と記録など評価の工夫の重要性を確認した。

管理職としての教育理念をもって教職員の指導にあたり、その能力や持ち味を発揮できるよう自己研鑽に努めることの大切さを再確認した。



(2) 足利地区

小中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

今後の学校経営を考えた時、次世代を担う教職員を育成していくためには、学校経営に対する資質・能力

を向上させ、参画していく自覚を高めていくことが大切であると考え、ミドルリーダーの育成のために教頭はどのように関わるべきかを研究・実践した。

イ 研究の概要

ミドルリーダーの育成に関して、次の5点に関して検討した。・ミドルリーダーに必要な資質と能力について・学校の現状と課題について・学校のこれまでの取り組みについて・ミドルリーダー育成の場（視点）について・ミドルリーダーを育成していく方法について等である。これらの項目について、知的関与、情的関与（共感的理解、受容的態度）、働的関与（共に働く）、物的関与（条件整備）という4つの関与の方法を具体的に検討した。

ウ 成果と今後の課題

ミドルリーダーの育成は、各校の実態に応じて4つの関与の仕方を生かしながらか意図的に育成の場を設けることを心掛けた。その結果、学校全体の動きや教職員の様子を把握しようとするミドルリーダーが育ってきた。

それらの教職員を育成するために十分な指導・助言ができるよう教頭は自らの資質向上を目指していく必要があることを理解した。

2 グループ協議内容

(1) 提言Ⅰについて

- ・教職員を育てていくには、協働体制で取り組むことが大切である。教職員の関係づくり、雰囲気づくりに食を介して行うとうまくいくことがある。〔あ班〕
- ・小規模校では、若い教師が増え、(十分な)対応が難しい。一方大規模校では、ベテラン教師が多く、指導がマンネリ化し新しい教育への意欲が低下してしまう。そこで、教頭として新しい情報を発信している。〔い班〕
- ・教科を超えて授業実践に取り組むことが大切である。授業を公開することで本気度のより高い教材研究ができる。また、授業研究で客観的な意見を出し合うことで教職員の資質の向上につながる。全教員が関われる時間を教頭が確保することも重要である。〔え班〕
- ・ベテランと若手で一緒に事例研究を行う。地区で共通の課題、研修の成果を互いに発表し合っている。ベテランをうまく活用し、活躍してもらう。〔お班〕
- ・教職員評価制度では、アドバイスが難しく日頃のがんばりと設定目標の差も感じるが、モチベーションを高くすることができる。学校経営との関わりを明確にすることが重要。〔く班〕

(2) 提言Ⅱについて

- ・ミドルリーダーをどう育てるかが難しい。30代に学習指導主任を任せてもよいのではないか。信じて任せる。失敗したらフォローするという姿勢が大事である。〔け班〕
- ・ミドルリーダーの捉え方をどうするか。単に年齢的な区分ではなく、リーダー性や仕事を処理する能力を見極めながら、教頭の立場として指導助言していく。組織として学校を動かすには、それぞれの教員の特性を見取りながら意識して言葉掛けをしていく。「教頭としての4関与(知的・情的・働的・物的)」のうち情的関与の重要性を再確認できた。〔う班〕
- ・4つの関与がとても参考になる。多様な発想を活かすためにも若い世代の意見を吸い上げる場の設定がとても大切。「期待して、任せて、サポートする。」を意識する。〔か班〕
- ・学級王国になりがちである。「～したら」と助言しても50代には難しい。若手と一緒に仕事を提案しても、一人でやった方が早いという考えで、一人で仕事を進めてしまう。〔き班〕

3 指導助言

(1) はじめに

- ・本分科会の研究課題は「教職員の専門性に関する課題」であるが、教頭の専門性は広く非限定的である。そうした中で、本研究大会が継続して開かれていくことは情報交換の場としても大変意味がある。提言Ⅰ・Ⅱの共通課題は年齢構成のアンバランスとミドルリーダーの育成であった。ミドルリーダー育成については、中教審でも課題意識をもっている。

(2) 提言Ⅰについて

- ・補足的な学習の推進は各学校の实际情况に応じて推進していくことが大切であり、チーム学校の実践にもつながる。
- ・共に学び合える校内体制の推進として一人一授業があるが、どのような目的で行うのかを説明するのは管理職の役目である。
- ・学力調査の結果を分析し公開しているが、結果を公開することが目標になってしまうことがある。分析から見えた課題を教職員が共通認識して授業を行うことが学力向上につながる。



(3) 提言Ⅱについて

- ・教頭の4関与の方向性を明示して教職員を育てることは、教頭の専門性の参考になる。可能な範囲で4関与の視点から教職員を育てることが大切である。
- ・教職員を育てていく上で大切なことは、前年踏襲ではなく、変革に参加させることである。また、校務分掌の連携を大切に仕事を体験させることも必要である。日々の業務の中で若手を育てることを大切にすることがミドルリーダー育成につながる。

(4) おわりに

- ・28年度中に新しい学習指導要領の告示が予定されている。その中のキーワードは「社会に開かれた教育課程」「チーム学校」「アクティブ・ラーニング」である。教頭は、情報を先取りして教職員に伝え、校長と共に人材育成や教職員の連携を推進することが重要である。

(記録：杉山 幸一・大竹 和広)

助言者 宇都宮市立西原小学校長 高山 裕一 先生

リーダーを育て、組織力を高めるための教頭の関与の在り方 —学校と地域・学校間の連携・協力を図る取組をとおして—

提言地区 南那須地区 南那須小中学校教頭会

小中連携における教頭の果たすべき役割

—更なる地域連携の視点を生かして—

提言地区 那須地区 那須町教頭会

1 提言趣旨

(1) 南那須地区

南那須小中学校教頭会

ア 主題設定の趣旨

多様化し、複雑化した今日的教育課題に対応するため、各学校における主務者が「外部」とのコーディネート力を身に付け、それぞれが他校や地域との連携・協力を図る中心となって校務に携われるよう、教頭がどのように関与し、教頭としての職務をどのように機能させていけばよいかを考察していく。

イ 研究の概要

研究2年次として、地域人材や地域の教育資源を活用した地域連携事業や中学校卒業後の進路を見据えた小中連携・一貫教育の研究実践を収集し、その結果を分析、検証、考察した。

特に、主務者が主体となってコーディネート力を発揮した事例において、教頭がどのように関与しながら主務者を育てることが効果的なのか、また組織力を高めていくことに繋がるのか、実践事例をとおして研究を進めることとした。

ウ 成果と今後の課題

「外部とのやりとり」の一部を主務者が中心となっで行えるよう、教頭が自らのコーディネート力を生かした助言、支援を主務者にすることによって、主務者同士の繋がり、他校や関係機関との円滑な関係が図られるとともに、校内体制の調整力を主務者に身に付けさせることができた。

今後は、多種多様な連携・協力事業の中でリーダーを育て、組織力を高めていくための、教頭の関与について実践研究を一層深めていきたい。



(2) 那須地区

那須町教頭会

ア 主題設定の趣旨

児童生徒をはじめ、学校、家庭、地域を取り巻く環境が様々に変化する中、「生きる力」の育成が求められている。そのためには、小中学校

9年間を見通した計画的かつ段階的な取組が必要であり、小中連携による教育は、現在の重要度が増している。そこで、小中連携に関する教頭職としての課題を把握し、それらの課題を解決するための取組をとおして教頭としての職務遂行の向上に向けた研究を行う。

イ 研究の概要

地域連携の視点を生かした小中連携の更なる推進と実践を通し教頭の職務遂行が十分に図られるために、現状の確認を行った。次に平成26年度の研究成果と課題を踏まえ、地域連携の視点を生かした小中連携の実践について調査した。また、学校適正配置の実施に伴う町教育委員会の地域連携に関する取組も含めて調査した。そして、これらの調査結果を基に成果と課題を整理し、次年度以降の研究推進に資することとした。

ウ 成果と今後の課題

研究を進める中で、教頭の役割は、組織の連絡調整及び各校間の情報収集と共有など多岐にわたるものが確認できた。自校のみならず、校区内や町全体にかかわる立場であることを再認識しなければならない。教職員の意識向上のみならず、保護者と地域への啓発や、地域人材を掘り起こしていくことが重要である。また、全町的な情報共有の仕組みや機会の充実も課題となり教頭としての関与の仕方を更に研究していく必要がある。

2 グループ協議内容

(1) 提言Ⅰについて

- ・教頭は小中連携事業が教育的効果を上げているのか評価、検証を行う必要がある。また、その評価を次年度に生かせるよう、改善策等を発案するとともに、教職員へ情報を発信することが大切である。〔い班〕
- ・渉外担当としての教頭の役割を踏まえた上で、地域連携教員、主務者の果たすべき役割と責任を明確にすることが大切である。〔い班〕
- ・教頭は、主務者（ミドルリーダー）にどのような資質・能力を身に付けさせたいのかを明確にする必要がある。その上で、地域連携教員や地域コーディネーターへの連絡・調整を意図的、計画的に行うことが大切である。〔か班〕
- ・教頭はまず地域を知るとともに、地域の人々との人脈をつくるのが大切である。〔か班〕
- ・教頭は主務者を育てるという視点から、場を設定し、主務者に企画、運営を「任せる」ことが大切である。その際、教頭は側面からの助言、支援を行うことが必要である。〔け班〕
- ・教頭は新たな地域人材の発掘を行い、それを主務者に繋げ、鳥瞰的な視点をもって連携事業を進めることが大切である。〔け班〕

(2) 提言Ⅱについて

- ・教頭は地域の要望に敏感になるとともに、常に地域の人々とのコミュニケーションを大切に、地域の情報収集に努める必要がある。また、その要望を地域連携教員と共有することで、地域コーディネーターの果たす役割を明確にし、地域連携事業が教育的効果を上げられるよう調整する必要がある。〔い班〕
- ・教頭は地域コーディネーターや地域連携教員との連絡・調整を密に行うことで、地域連携事業における若手教員の役割を明確にすることが大切である。その際、若手教員と地域の人々との関係を構築させるような意図的な働きを行う必要がある。〔か班〕
- ・教頭は地域コーディネーターの後継者を育てていくという視点をもつことが大切である。〔か班〕
- ・教頭は「小小連携事業」や「小中連携事業」が機能的に推進されるよう、その組織作りとともに連絡・調整役としての役割を果たすことが大切である。〔け班〕
- ・地域人材を活かすために、教育行政の支援は欠かせないのではないか。〔け班〕

3 指導助言

(1) はじめに

小学校と中学校の教頭の仕事は微妙に違うが、忙しさは変わらない。また、地域とのかかわりが大事な仕事であることも共通している。両校の発表とも小中連携や地域連携をテーマとしており大変重要な各校が抱える課題でもある。

(2) 南那須地区の提言に関して

- ・地域連携では、例年実施していると目的や意義が曖昧になってしまうことがある。何を求めるのか、連携する良さ、良さを生かす場面等を常に客観的に考えることが大切である。
- ・小中連携では、小中で発達段階の違いがあり相互理解することが重要である。また、小小連携では児童が協働学習をする場面を設定すると良さが高められるのではないかな。
- ・連携によって、今までより学習効果が上がればカリキュラム化し時間や予算の確保を図って行くことが必要になる。反対に、無理なことは実施をやめる見極めも必要である。



(3) 那須地区の提言に関して

- ・中学校の学校支援協議会では、中学生が地域で活躍する場面や認められる場面を意識して設定して欲しい。また、学区内の学校支援組織等で役員が重複している場合があり今後は組織を整理していくことも必要であろう。
- ・地域コーディネーターは、学校支援という意識をもった学校側の要望が分かる人が理想である。何より地域と学校のクッション役になってくれる人材の発掘が今後の課題である。
- ・継続のための課題として、予算や人材はいつまで続くか分からないのが現状である。人材については複数体制をとり、支援内容も必要性のあるものであることが継続のコツである。また、地域人材を育成することも大切であり教頭の仕事である。
- ・できるだけ無駄を省いて本当に教育的効果があるものを実践して欲しい。

(記録：藤田 繁・石田 弘)

自尊感情や望ましい人間関係力を育成するピア・サポート活動の推進

鹿沼市立みどりが丘小学校 大橋 久美子

本校は、平成5年に開校し23年目を迎えた比較的新しい学校です。学区は新興住宅地が大半を占め、昔ながらの地域性はやや薄い環境にあります。保護者や地域の方々が毎日のように足を運んでくださるほど、ボランティア活動が大変盛んな学校です。

本校の自慢とする教育活動は、10年来続くピア・サポート活動です。たくさんの人との豊かなかかわりや体験的な活動を重視し、自尊感情や望ましい人間関係力を育成することを目的として、全教育活動を通して推進しています。また、それらを支えるPTA活動やボランティア活動は、結束力があり大変協力的で、本校の誇れる活動の一つになっています。

今年度改善した取組として、年度初めの授業参観、PTA総会があります。400名近くのPTA会員数があり、授業はほぼ全員の保護者が参観するにも関わらず、総会への参加者は例年50名足らず。そこで、PTA役員と日程や内容を工夫し、今年度は100%に近い参加率をあげて、教育活動への更なる理解や協力を得ることができました。総会後の「顔合わせ会」では、親子のピア・サポート活動を導入し、保護者に自分の子どもの良さを披露してもらった子ども達は、満面の笑みを浮かべていました。

また、地域コーディネーターを中心に、「夏休みチャレンジキッズ」を今年度初めて開催しました。参加した児童はもちろんのこと、50名余のボランティアの方々も交流や体験をととても喜んでくださり、地域とのピア・サポート活動として大変有意義な機会になりました。

歴史の浅い本校は、機動力と活力みなぎる保護者や地域の方々と、熱意と愛情をもった教職員が共に手を取り合っており、現在、躍進し続けています！



【夏休みチャレンジキッズ】

地域の絆づくり『^{やままえ}山前ふれあいまつり』への参加

足利市立西中学校 新井 啓永

「山前の子をみんなで育てよう」を合言葉に、山前ふれあいまつりがはじまってから、今年で15回目になります。地区の文化祭と合同開催となってからは4年目となり、子ども達ばかりでなく、年々、老若男女たくさんの方々が積極的に参加し、よりいっそう楽しく、有意義な“ふれあい”がもてています。今年も10月25日(日)に、自治会連合会、社会教育振興委員会を中心に、多くの各種団体、小中学校、PTA、有志の方々が、地域の小学校を会場に、テーマ「家族・友達・近所の人をさそい合って楽しい“まつり”を創ろう」のもとに一齐に集い、盛大な開催となりました。

地域の中の学校である西中学校も、PTAが「綿飴販売」のほか、「読み聞かせ」、「紙飛行機づくり」を行いました。多くの中学生がボランティアとして参加し、 TENT張りや片付け、販売や催し物の手伝い、さらには、小さな子どもたちの遊び相手など、学校での様子とは、また違った一面を見せてくれます。普段は叱られることの多い家庭での生活や学校生活から一歩外に出て、大空のもとで伸び伸び体を動かし、その結果、褒められたり、感謝されたり、さらには、頼りにされたりした時の表情は、実にいい顔しています。

私も幼い頃、地域のお祭りや、出店のテント先での思い出は数多くありますが、それが、時が経ち、いつの間にかテントの中に自分がいました。幼い日の自分の心の中に何かが残っていて、それが自分を動かしたのでしょう。

年に1度の「山前ふれあいまつり」ですが、地域の中の自分、学校を感じられる1日です。



向上心みなぎる宇上小学校副校長・教頭会

宇都宮市・上三川町小学校副校長・教頭会長 渡 邊 宏

宇都宮市・上三川町小学校副校長・教頭会は会員77名で構成され、研修と親睦を図りながら両市町の教育の振興に寄与することを目的として活動しています。今年度は23名の新会員が加わり、新たな組織で日々会の運営に取り組んでいます。また、全国公立学校教頭会・県教頭会の研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」に基づく6課題を受け、10班編成の班別研修にも継続して取り組んでいます。今年度は関ブロ山梨大会をはじめ、県研究大会、宇上地区大会において、7つの班が提言発表をしました。また、毎年それぞれの課題解決に向け各校の実践例や改善に関する提案、具体策などを持ち寄り班内で協議を重ねるとともに、その結果を研究集録にまとめるなど、それぞれ管理職としての資質向上を目指して研鑽に励んでいます。

3回の全体研修会では、県や市の指導主事、地区の校長先生をお招きして、「道徳の教科化」「学校組織マネジメント」「学校経営における副校長の役割」といったテーマで示唆に富んだ講話を頂きました。副校長・教頭として、何をすべきか、どう関わるべきかを念頭に置きながら熱心に聞き入る会員の姿勢は、正に、各校のリーダーそのものの感を窺わせてくれます。

以前本会に所属していた市内中学校の副校長先生が、「毎回、講師を招聘しての研修会、班別の自主的研修、研究成果の実践発表と、小学校副校長会の熱心さには脱帽です。」と感嘆されていた通り、宇上小学校副校長・教頭会は、全公教が唱える「継続性」「協働性」「関与性」の3視点に沿った研究に邁進していると確信しています。

進歩と躍動のある郡市教頭会

芳賀地区小中学校教頭会長 岩 崎 晶 子

芳賀地区小中学校教頭会は、真岡市・益子町・茂木町・市貝町・芳賀町の教頭50名（小学校33名、中学校17名）で組織されています。会員相互の研修と親睦を図り、教頭の資質の向上と学校教育の振興を図ることを会の目的としています。

全体研修を年2回実施しています。1回目は、芳賀地区小中学校教頭会総会の日です。今年、5月に芳賀地区小中学校長会長・真岡市立真岡小学校長大関馨先生から「県及び芳賀郡市の状況、国や県の動向についてや、教頭としてのリーダーシップ、目指す管理職の姿について」の講話を伺いました。「教頭も経営者であり、人材の育成者であり、教育者である」、「管理者は常に教員の立場に立ってという意識を忘れないようにする」というお話が強く心に残りました。2回目の研修は、真岡市の施設見学です。芳賀地区エコステーション、岡部記念館（金鈴荘）、真岡木綿会館、久保記念会館です。芳賀地区エコステーションは、H26年3月に竣工した新しい施設です。真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町が連携して整備し「循環型社会」の形成を目指す、環境にやさしい近代的な施設です。岡部記念館（金鈴荘）は、明治中期に建築されたもので、真岡市近世百年の歴史・文化遺産として保存されています。



芳賀地区エコステーション、岡部記念館（金鈴荘）、真岡木綿会館、久保記念会館です。芳賀地区エコステーションは、H26年3月に竣工した新しい施設です。真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町が連携して整備し「循環型社会」の形成を目指す、環境にやさしい近代的な施設です。岡部記念館（金鈴荘）は、明治中期に建築されたもので、真岡市近世百年の歴史・文化遺産として保存されています。

11月の県の研究大会では、第2分科会「子どもの発達」に関する課題で発表します。研究主題「子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方～異校種間連携における教頭の果たす役割～」です。教育活動における教頭のかかわりについて発表します。研究委員12名が中心となり研究を進め、50名の取組をまとめたいと思います。

地域と取り組む蛍を呼び戻す運動

小山市立中小学校 上野 敏晴

小山市南西部の豊かな田園地帯に位置する本校の特色は、地域の方と共に蛍を呼び戻す運動に取り組んでいることです。中心になっているのは「ほたる飛び交う中地区を目指す運動の会」の方々です。学校の南側を流れる巴波川は、かつて蛍が多数生息し、多い所では柱のように群れをなし、光り輝きながら飛んでいたそうです。

平成14年に校庭の東側に、川の流れを再現した『ほたるのビオトープ』を造り、蛍を育てる活動が始まりました。学校では、5年生が中心となって総合的な学習の時間で取り組んでいます。幼虫の餌は、近くの用水路にいるカワナです。育てた蛍の幼虫は、2月に全児童が参加して『ほたるのビオトープ』に放したり、巴波川に放流したりします。幼虫は、5月頃になると土に潜ってサナギになり、6月に成虫になります。

学校では、6月の第2週の土・日曜日に「ほたるを観る会」を行います。市長さんを始め、多くの来賓の皆様や保護者・地域の方をお迎えしてセレモニーを実施し、ビオトープを飛び交う蛍を観賞します。正門前に看板や提灯を取り付ける等、ちょっとしたお祭り気分です。

児童は、この活動に取り組むことで、自然の尊さや地域の良さについて学んでいきます。児童が描いた小山市の未来の絵には、蛍が飛んでいる作品が数多く見られました。蛍を観ると大人も子どももワクワクしてきます。これからもこの活動が、末永く続くことを願っています。

獅子は千尋の谷に…

塩谷町立大宮小学校 豊田 久仁子

前任校は、統合のため廃校になりました。その時のPTAの会長さんや執行部の皆さんとは苦労を共にしたこともあって、今でも集まりをもつ機会があります。

その中の一人の保護者の方と、お子さんのことについての近況を話しました。その方のお子さんは、小さいときから野球がとても上手でした。小学校2年生でも6年生に交じっても遜色なくらいでした。廃校の時には、体の小さい6年生だったその子も、肩幅も広くなり、胸板も厚くなり立派な高校生に成長し、全寮制の高校で野球を続けていました。しかし・・・レギュラーになれたという話は聞こえてきません。ある時、その子はお父さんにぼつりと「高校を卒業したらもう野球はやらない。」と言ったそうです。その時にお父さんは、「ふざけるんじゃない。自分が選んだ道だろう。甲子園に連れて行くと約束したことはどうなった。何一つ俺との約束を果たしていないだろう。」と叱責したそうです。毎日血のにじむようなトレーニングを積んでいること、寮の中での辛いしきりに一人で耐えていることなど、すべてを承知した上での言葉でした。明るく笑顔で話すその方の目には光るものがありました。父親としても断腸の思いで放った言葉に違いありません。私より10歳以上も年下の父親に、真の子育てと親の愛情の深さを教えられました。

渡良瀬川の流れとともに

佐野市立船津川小学校 尾花 久

「わたらせの 清き流れに～」と校歌が始まる本校は、佐野市の最南端、渡良瀬川のほとりにあり、自然に囲まれた開校142年の学校です。渡良瀬川を南へ渡ると、夏の最高気温で有名な群馬県館林市があり、栃木県と群馬県の県境に位置しています。

本校は全校児童18名の完全複式で、子どもたちは素直で明るく、皆兄弟のように仲良く学校生活を送っています。今年度の4月から新任教頭として勤務しておりますが、今まで中規模校や大規模校の勤務が多かったため、赴任当初は「違和感」でいっぱいでした。何でも全校一緒。当たり前と言えば当たり前ですが、今では一緒でない活動が「違和感」となりました。中でも、全校児童での一輪車乗りや全校合奏の取組には驚きました。1年生2名もしっかりと自分の役割を果たし、9月の運動での一輪車の発表、10月の県音楽祭中央祭での合奏の発表といずれも堂々とでき、わずか18人ですが、船津川小パワーを感じることができました。

こんな素敵な学校も、平成28年度をもって閉校となります。自分自身やっと慣れてきたところで、寂しい気持ちでいっぱいです。平成29年3月には、143年の歴史を閉じる閉校式を行う予定です。閉校後は近くの植野小学校に統合されます。残り約1年、教頭としての役目を果たすべく、子どもたちのために全力を注いでいきたいと思っております。

編集後記

この42号発行に向けた編集会議は、寝屋川市の中学1年生2人の殺害・死体遺棄という痛ましい事件が起きた直後に開かれました。我々教職にある者にとっては、学校を離れた場所や時間帯での子どもたちの安全についても考えさせられる非常にショッキングな事件でした。そこで、今回の巻頭言は、学校外での子どもたちの生活に深く関わることも多い児童相談所の方にお願いをしました。皆様の今後の活動に参考となれば幸いです。

末文ですが、今回の会報発行に際し、原稿執筆等にご協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。(西原)